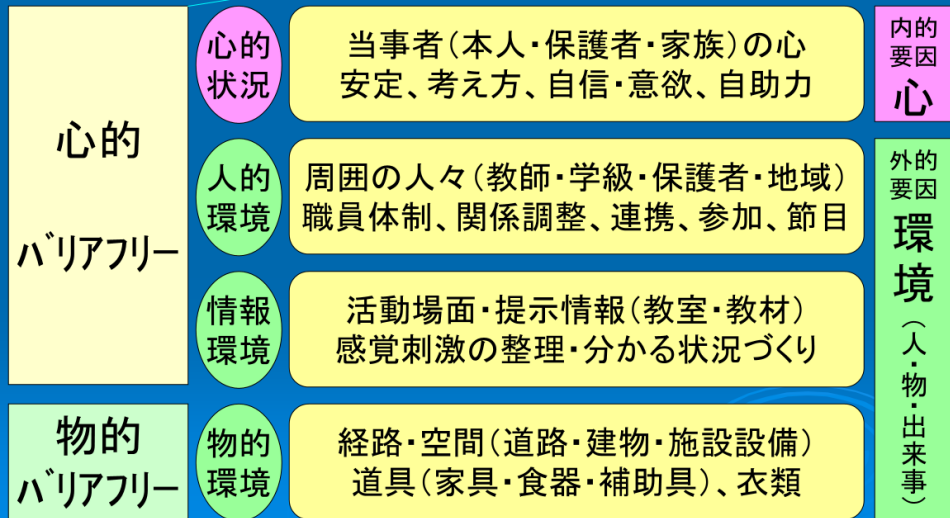


広義の「バリアフリー」 『心的バリアフリー』 を加えた概念図

当事者の生活環境(人的環境・情報環境・物的環境)に働きかけ、心的状況の改善を図ることで、当事者にとっての環境の映り方・感じ方・受け止め方も含めて、環境の中の障壁を軽減・除去しようとする支援の在り方。

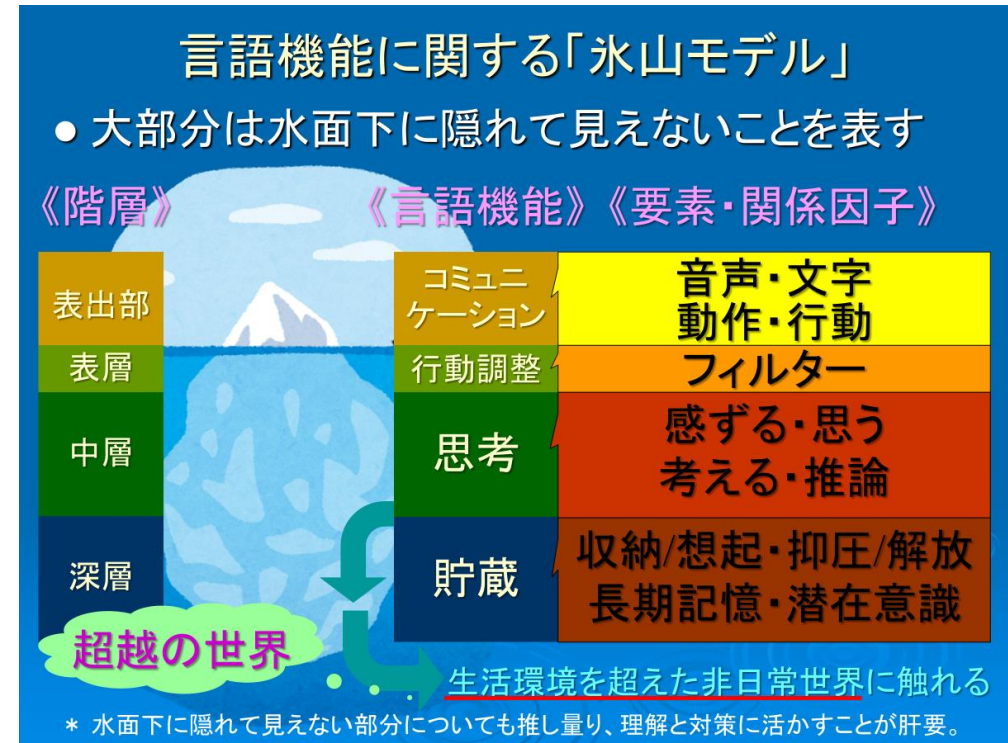


- 「物的環境」としては、狭義のバリアフリーで扱う経路・空間だけでなく、道具(家具・食器・補助具)の整備が重要。
 - 「情報環境」としては、心理的安定につながる感覚刺激の整理や、情報の可視化等による分かる状況づくりが重要。
 - 「人的環境」としては、子どもを支える立場でもある保護者の理解と心理的安定を図り、笑顔のある養育環境が重要。
 - 1~3の環境整備を通して、「心的状況」を整える中で、子どもの考え方を、より柔軟で適応的なものに変えていく。
- 以上の諸点を考慮に入れながら、どこに力点をおくか支援の方針を立てる。

可視化の意義

自己選択可・主体性尊重
 ・見ることに強い人
 ・有効に働く人
 ・うるさくないさりげなさ
 ・瞬時性
 ・選択制
 ・持続性

③ 行動を変えるための鍵を見出す ~環境→考え方→行動の波及を想定して~

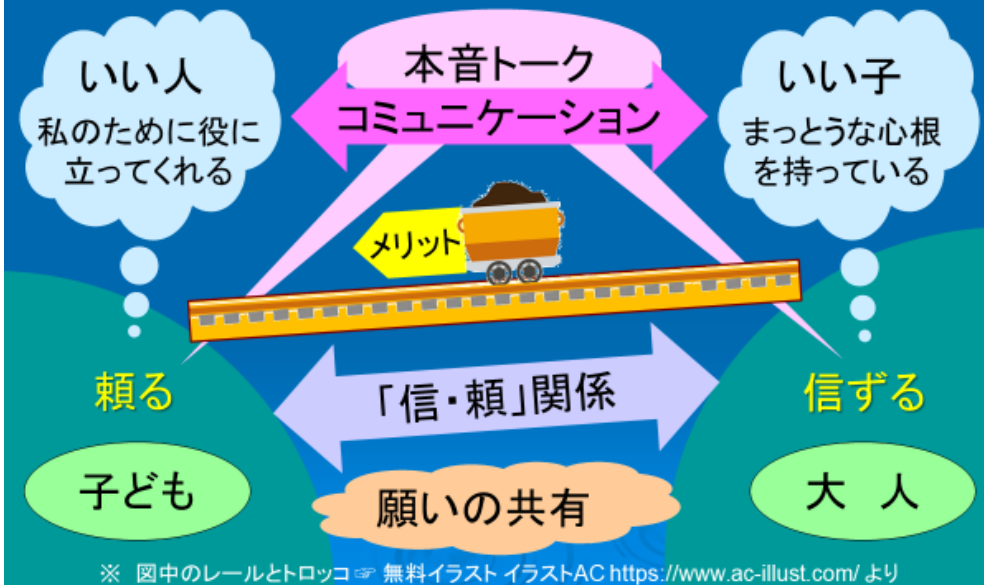


発達障害の子どもを理解を進めるために、筆者は、言語機能に関する「冰山モデル」を考案してみました。しかし、水面下の見えない部分を推察しようとするのは、発達支援の専門家にとっても相当に難解です。

そこで、ここでは、まず、支援のスタートラインにつくために、状況を見直して整理しながら、子どもの行動に作用する力点を探っていくアプローチを提案します。

➤ キーパーソンとなる人は？...トロッコモデル

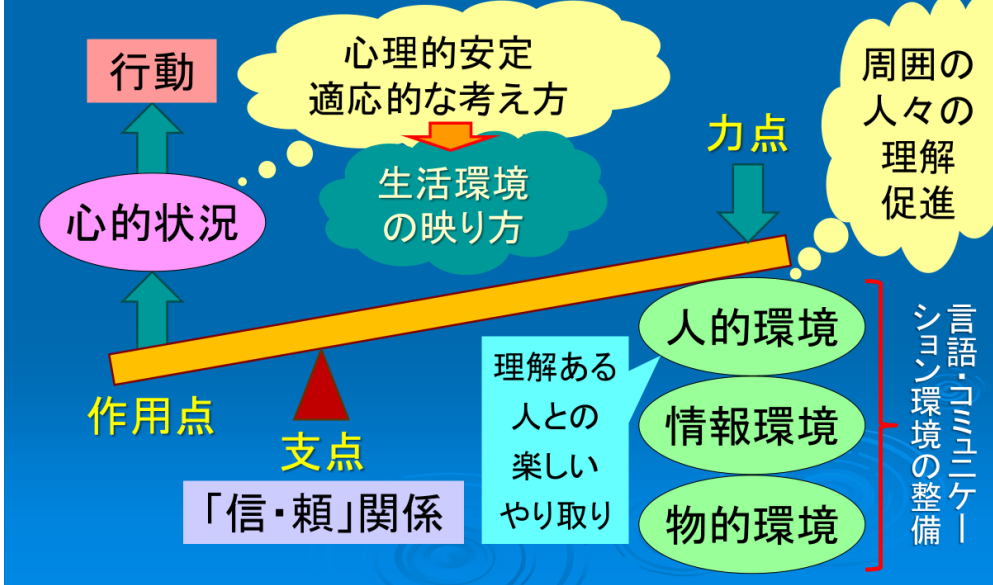
❖ 子どもにとってキーパーソンとなる人の見極め



1. キーパーソンとは、子どもにとって、役に立ってくれらると感じられる「いい人」で、言い換えれば、頼れる大人。
 2. キーパーソンは、その子どもがまっとうな心根を持っていることを理解した上で、「いい子」だと信じられる大人でもある。
 3. キーパーソンである大人と子どもとの関係は、信ずる者と頼る者という関係で、「信・頼」関係と言うことができる。
 4. 両者の関係は、メリットを提供する者とされる者という関係で、対等ではなく、大人の側の、「お手並み拝見」という余裕も大事。
- 谷を隔てた二つ山という距離感と両者の高低差を、橋を下る「トロッコ」で表している。

➤ 働きかけるポイントはどこか？...てこモデル

● 実際に働きかけるポイントを明確にするために



1. 子どもの「行動」を変えるためには、それを引き起こしている「考え方」、更には、そのもとになっている「環境」を変える必要があり、その点こそが働きかける「力点」となる。
 2. 支援者は、子どもの身近な環境に働きかけることで、間接的に「考え方」を変え、それによって、「行動」を変えることを目指す。
 3. こうして、「環境→考え方→行動」という形で、影響力の波及が生ずるように、環境を整備することが、「できる状況づくり」となる。
 4. そして、子どもの人的環境・情報環境・物的環境の整備を通して、心的状況を整えていく。
- このように、直接働きかけるべきは環境であることを、「てこ」の力点として表している。